

〔多武峯略記〕奉送多武峯聖靈院御裝束并靈物等事

母屋御鏡九面八花形

〔大鏡後一條〕おほいぬまるおとこいでき、給ふやうたひとつつくりて侍りといふめれば、よつぎいとかんある事なりとて、うけ給はらんといふ、まげきいとやさしげにいひいづ、

あきらけきかゝみにあへば過にしもいまゆくすゑのことも見えけり、といふめれば、よつぎいたくかむじて、あまた、び誦して、うめきて返し、

すべらきのあともつぎくかくれなくあらだに見ゆるふるかゝみかも

今やうのあふひやつはながたのかみらてんのはこにいれたるに、むかひたる心ちし給ふや、いでやそれはさきらめけどくもりやすきところあるや、いかにしへのこたいのかゝみは、かねまゐくて人手ふれねど、かくぞあかきなど、またりがほにわらふかほつきゑにか、まほしく見ゆ、

〔義經記七〕平泉寺御見物の事

此僧は讃岐の阿闍梨と申候が、北陸道にかゝり、越後に下り候、御内の勸進はいかやうに候べきと申ければ、富樫よくこそ御出候へとて、加賀の上品五十疋、女房のかたより、罪障懺悔のためにとて、白袴一こし、八はながたにいたる鏡、さては家の子、郎等、女房たち、下女に至るまで、思ひくに勸進に入る、

〔飛燕外傳〕飛燕略始加大號、婕妤奏書於后曰、天地交暢、貴人姊及此、令吉光登正位、爲先人休、不

堪喜豫、謹奏上二十六物以賀、略七出菱花鏡一、略

〔日本書紀九〕五十二年九月朔丙子、久弋濟等從千熊長彥詣之、則獻七枝刀一口、七子鏡一面、及種々重寶、